

平成 21 年 6 月 15 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720189
 研究課題名（和文） 清末民国期、江南デルタ農村の地域統合と民間信仰に関する基礎的研究
 研究課題名（英文） Folk Religion and Rural Society in the Jiangnan Area in Modern China
 研究代表者
 佐藤 仁史（SATO YOSHIFUMI）
 滋賀大学・教育学部・准教授
 研究者番号：60335156

研究成果の概要：

本研究課題では、江南地方の「社」という村落レベルの基層社会における指導層と、彼らの主導によって統合される「社」の構造と共同性について考察した。その際、村廟を中心とする民間信仰とその担い手である富農層の動向の分析を通じた「社」の文化的社会的統合の実態解明に重点を置いた。新編郷鎮志をはじめとする地方志や地方新聞などの地方文献の蒐集・分析、農村老幹部や農村住民、老藝人、宗教職能者に対して実施した口述調査を複合することによって、江南農村の多層性に関する新たな視点を提示できたと考える。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	900,000	0	900,000
2007 年度	600,000	0	600,000
2008 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	120,000	2,120,000

研究分野：中国近現代史

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：近代中国、清末民国期、江南デルタ農村、民間信仰、フィールドワーク

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者による研究の全体構想は、清末民国期の江南デルタ農村社会の構造変動を、在地指導層や在地知識人の言動や秩序意識に着目しつつ分析することを通じて、20世紀初頭の中国における国家—社会関係の変容過程と特質を解明することを主眼としてきた。従来の研究においては、主に、県や市鎮レベルの地域社会を主導した指導層の

分析を通じて、国家が地方の「制度化」に際して根拠としたのは如何なる勢力や慣行であったのか、地方の「制度化」は地域社会に何をもたらしたのか、また在地指導層はかかる過程をどのように受け止めたのかという問題群を検討してきた。

(2) 市鎮在住の指導層が地域統合に果たした役割については、2003・2004年度科学研究費

補助金若手研究B「清末民国期江南市鎮の指導層と地域統合に関する基礎的研究」によって『呉江報』や『新黎里』などの地方新聞を収集して基礎的な考察を行った。また、研究分担者として参与している、2004-2006年度科学研究費補助金基盤研究B「清末民国期、江南デルタ市鎮社会の構造的変動と地方文献に関する基礎的研究」においても、市級や県級の所蔵機関に所蔵される地方文献の調査を行い、民国期に県や市鎮においての刊行された文献資料を収集してきた。

(3) しかしながら、上記の研究において十分に検討されなかったのは、県レベルにせよ、市鎮レベルにせよ、考察の対象が地域指導層・地域知識人層に偏重しており、一般の地方住民が地方の「制度化」を受け止めたのかについてである。また、社村という村落レベルの統合に関する分析の不足を痛感するに至った。

2. 研究の目的

(1) 重要な研究テーマであるにも関わらず、研究代表者によって十分に検討されてこなかった、江南地方の「社」という村落レベルの基層社会の指導層である富農層と彼らの主導のもとで運営される「社」社会の統合の実態を解明することが主要目的である。とりわけ、従来の先行研究において重厚な蓄積のある農村の生産関係や農民闘争といったテーマに比して、「社」社会が有していた文化的社会的統合の実態については殆ど研究の俎上にのぼることはなかった。したがって、本研究課題においては、村廟を中心とする民間信仰とその担い手であったと思われる富農層の動向に着目することで、「社」の文化的社会的統合の実態を解明する手がかりを得ることをめざす。

(2) 「3. 研究の方法」においても述べるように、民国期における「社」の構造と実態を理解するために口述調査を実施すると同時に、江南農村の現況について景観調査などのフィールドワークを実施し、民国期と現代の比較を通して遡及的に伝統中国期における農村を理解することを試みる。

3. 研究の方法

(1) 廟を中心とする民間信仰の実態に関する情報は、従来使用されて文献史料のみからえることはきわめて困難であった。この点に鑑

み、本研究課題においては次の2点によって史料上の限界を克服せんと試みる。第一は、地方文献という地域社会に所蔵されていて十分に利用されてこなかった文献史料群を蒐集・利用する点である。第二は、景観調査や口述調査をはじめとする広い意味でのフィールドワークの成果を研究に導入する点である。

(2) 地方文献の収集 本研究開始以前に既に収集していた新聞資料（『蘇州明報』『呉江日報』『新黎里』）から関連記事を抽出する作業を進めるのと同時に、従来までの調査で存在を確認した呉江県や青浦県の市鎮で発行された新聞や、档案資料、文史資料の精査・収集を実施する。

(3) フィールドワーク

① 景観調査 文献史料に断片的に登場する著名な寺廟や村廟の現地検分を行い、地理情報や由来についての基礎情報を得ることを最も基礎的な作業として行う。

② 口述調査 事前に十分な予備調査を行い、定点観測を実施する対象としたいくつかの村において、老幹部や老農民に口述調査を実施する。解放前の状況を知る老人は既に80歳を超えており、聴き取り調査は急務であるからである。

4. 研究成果

(1) 本研究課題で得られた成果を総括すれば、各種の地方文献から廟会やそれを組織した富農層に関する資料を精査することによって、「社」レベルの基層社会運営を概観すると同時に、口述調査によって文献資料からは殆ど知ることのできない江南農村の社会文化統合や重層的な空間性についての具体的かつ新たな事実を発見することができた。特に顕著なのは、「解錢糧慣行」の相対化である。従来の研究においては、市鎮の城隍廟・東嶽廟と村廟との間に形成されていた「解錢糧慣行」は両者の従属関係として捉えられていた。しかし、本研究によって浮かび上がってきたのは、村廟からみた場合、村内部の地縁組織である「段」、村、村と村との関係に村民たちが比重を置いていた事実である。また、どの関係や組織も村民たちを排他的に規制する装置となりえずあくまでも緩やかな共同性であったこと、土地売買、金銭の貸借、水利などの側面においても、個別に築かれた関係に基づいていた点にも商業化が高度に進展した江南農村の特徴を見い

だすことができると指摘した点も本研究による新知見である（佐藤仁史「民国期江南の廟会組織と村落社会——吳江市における口述調査を中心に」『近きに在りて』55号、2009年）。

(2) 本研究において導入した方法論上の試みの一つに地方文献史料の蒐集と活用がある。江蘇省吳江市と上海市青浦市を中心として、江蘇省蘇州市、浙江省嘉興市、浙江省湖州市における市級・県級の檔案館・図書館において、地方志、地方新聞、地方檔案の調査・蒐集を実施した結果は、太田出・佐藤仁史編『太湖流域社会の歴史学的研究——地方文献と現地調査からのアプローチ』（汲古書院、2007年11月）「第Ⅲ部地方文献解題編」として公表した。代表的な所蔵期間や在地社会の分析に有用な各種地方文献に解説を附したものであり、希有な試みであると言える。加えて、フィールドワークの過程において民間に所蔵されている「地方文書」の蒐集も行った。

(3) 方法論上のもう一つの特徴は現地調査、とりわけ口述調査を全面的に研究手法に導入した点である。口述調査そのもの自体は東洋史学の分野においてもさほど珍しいものではなく、少なからぬ蓄積があるが、本研究課題における特徴は、老農村幹部ばかりでなく、一般の老農民や、宗教的職能者、廟の管理人、藝人、漁民による進行組織の「香頭」（リーダー）、漁民、市鎮住民など社会の周縁にいたる人々にも調査を実施し、在地社会を多面的複眼的にとらえて検証した点にある。また、口述調査の一部は話し手や現地協力者の同意・協力を得て口述記録集として刊行し、広く学界全体に共有することを目指している（佐藤仁史・太田出・稲田清一・吳滔編『中国農村の信仰と生活——太湖流域社会史口述記録集』汲古書院、2008年12月）。

(4) 本研究課題によって得られた成果は、明清史の分野で蓄積されてきた市鎮研究の系譜に連なるものであるが、市鎮と社村の関係、社村の角度からみた江南農村空間の重層性の新たな側面を示した点が研究史上の貢献であると言える。また、本研究は、中国華北農村慣行調査やそれを土台に1980年代以降進められてきた中国農村研究とも密接な関係にある。江南農村の地域性を明らかにしつつ、他の地域との比較を行うための材料や分析枠組を提供することは、中国農村社会史研究をより高い次元に進めるための基礎作業であると位置づけている。なお、『太湖流域

社会の歴史学的研究』については、『集刊東洋学』と『史学』に書評が掲載され、高い評価を得ている。『中国農村の信仰と生活』も『中国研究月報』に書評が掲載される予定である。

(5) 本研究課題で得た成果を踏まえた今後の展望は次の2点である。

① 民国期を中心とする伝統中国期における江南農村の社会統合については一定程度解明されたので、中国建国以降に市鎮社会や農村社会がどのように再編・改造されたのか、再編・改造に際して伝統中国期の社会構造とはどのように参照されたり克服されたりしたのかを、1950年代～1960年代の集団化時期を中心に検証する点である。明清期と1980年代以降に分析が集中している江南市鎮研究の空白を埋める作業である。

② 本研究の主要方法論を踏襲して地方文献と口述記録の両輪によって中国建国初期における基層社会の再編を分析する点である。地方文献について言えば、当該時期は圧倒的に檔案が中心となってしまうが、既に蒐集した「地方文書」と相互に参照しつつ、異なる立場・階級の話し手に口述調査を実施し、当該歴史過程に対する様々な声を拾うことによって立体的な地域史像の構築を目指したい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 佐藤仁史「清末民初在郷知識份子的文明觀与郷土觀」『日本中国史研究年刊<2006年度版>』日本中国史研究年刊行会、267—298頁、2008年、査読有り。
- ② 佐藤仁史・太田出「太湖流域社会史現地調査報告——外国史研究者とフィールドワーク」『近代中国研究彙報』通巻30号、91—115頁、2008年、査読無し。
- ③ 夏氷（佐藤仁史訳）「清末民初蘇州の民紳層とその活動」『史学』第76巻第4号、1—25頁、2008年、査読無し。
- ④ 佐藤仁史「清末民初の在地知識人における文明と郷土」『中国——社会と文化』通巻21号、33—55頁、2006年、査読有り。

〔学会発表〕（計3件）

- ① 佐藤仁史「近現代江南的村落社会与民間信仰——以吳江市的口述調査为中心」復旦大学歴史系主催“江南社会与中外交

流” 国際学術研究会、2008年9月6日、復旦大学。

- ② 太田出・佐藤仁史「水上居民と近現代浙江社会——九姓漁戸調査を中心に」にんぷろワークショップ「焦点としての寧波・浙江——文化の多層性とその環境——」2008年7月27日、東京大学。
- ③ 佐藤仁史「ライフヒストリーと江南農村——太湖流域社会史口述調査に即して」, 第1回NIHU現代中国地域研究プログラム主催「オーラルヒストリーと中国現代史研究」2008年6月21日、東洋文庫。

[図書] (計2件)

- ① 佐藤仁史・太田出・稲田清一・呉滔編『中国農村の信仰と生活——太湖流域社会史口述記録集』汲古書院、2008年、全410頁。
- ② 太田出・佐藤仁史編『太湖流域社会の歴史的研究——地方文献と現地調査からのアプローチ』汲古書院、2007年、全394頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 仁史 (SATO YOSHIFUMI)
滋賀大学・教育学部・准教授
研究者番号：60335156

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：